

## 木村俊道著『文明の作法：初期近代イングランドにおける政治と社交』

関口，正司  
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/26465>

---

出版情報：政治研究. 59, pp.47-51, 2012-03-31. 九州大学法学部政治研究室  
バージョン：  
権利関係：

## 書評

木村俊道著『文明の作法——初期近代イングランドにおける政治と社交——』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）

関口正司

本書は、著者の木村俊道氏が九州大学法学部に助教授（准教授）として赴任後、二〇〇三年から二〇〇八年にかけて、『政治研究』や『法政研究』に発表した論文に加筆修正を行なって一冊にまとめたものである。博士論文を元にした前著『顧問官の政治学——フランシス・ペイコンとルネサンス期イングランド』（木鐸社、二〇〇三年）から、わずか七年での刊行である。しかし、けっして小手先の早業ではない。著者は文脈を重視する思想史の方法を採用しているため、各章末の中や巻末の文献目録に掲げられた参照文献の分量は気が遠くなるほど膨大になっている。間違はなく本格的研究である。研究以外の様々な負担が増大していく中で、の労苦は、想像に

あまりある。にもかかわらず、著者は、著者の言葉を借りれば「もうひとつの博士論文」を書く心構えで粘り強く取り組んだ。本書は、そうした研究姿勢が見事に開花した成果である。

本書のキーワードは *civility* である。礼儀や作法とも訳すことのできるこの語は、本書では、安定的な政治運営や外交に不可欠な行為の「型」という意味で用いられている。政治社会の存続には、秩序そのものを破壊しかねない激しい暴力的な対立の抑制が不可避である。しかし、暴力につながる衝動や感情を、権力を絶えず直接的に行使して抑え込むことは難しく、かえって逆効果にもなりかねない。必要とされるのは、むしろ、治者と被治者の双方に、共存のための行為の「型」が習慣として身に付いていることである。そうした「型」がいわば作法として社会的に定着することで、当該政治社会にとって必須の文化資本が確立するとも言える。これは *civil* と形容できる社会状態であり、本書によれば、一八世紀後半に登場する *civilization* という語以上に、「文明」という訳語を当ててにふさわしい社会状態でもある。要するに、*civility* は、本書のタイトルである「文明の作法」そのものを指す、と言っ

てよいであろう。

本書は、序章と終章を含め、全部で八つの章で構成されている。序章「失われた〈文明〉」は、「文明の作法」という視座設定を総論的に説明した上で、この視座設定が従来の政治思想史研究における盲点であったことを示して、本書の意義を明らかにしている。第一章「宮廷の政治学」では、原著『顧問官の政治学』の関心を継承して、初期近代とりわけ当時のイングランドの宮廷が注目され、宮廷が「文明の作法」の発信源の役割を果たしていたことが指摘され、また、思想的見地からは、トマス・モアからヒュームに至る「文明の作法」を基調とした「宮廷の政治学」の持続的展開が強調されている。第二章「作法書の世界」では、「文明の作法」が身体的に習得される実践知であるという理解を前提に、先進文明国であるフランスやイタリアの作法書が後進国イングランドに受け入れられていった経緯がたどられている。ただし、著者によれば、作法書はあくまでもマニュアルであり、身体的訓練に代わるものではない。そこで、作法の身体的習得の重要な機会を提供したものとして、第三章「政治教育としての大陸旅行」では、大陸旅行の実践とそれに関する言説が検討され

ている。

第四章「外交の作法」、第五章「文明化された共和国」では、政治に関する現実と理論の世界が中心的に取り上げられている。第四章では、外交を表わすのに「diplomacy」という一八世紀後半からの用語ではなく、「negotiation」という語が用いられていた一八世紀前半までの時期を対象に、この時期の交渉と作法との密接な関連が丹念に跡づけられている。この関連を大きく損ねたのが、本書の議論によれば、デモクラシーとナショナリズムの到来を告げたフランス革命である。この見方をふまえながら、第五章では、フランス革命に先だって、一七世紀イングランドに登場していた共和主義の言説に立ち戻っている。考察の中心的対象はハリントンである。宮廷の作法に親しみ、君主（チャールズ一世）を敬愛して止まなかったハリントンが、原著『オシアナ共和国』で共和制を論じた際の中心的関心は、本書によれば、共和制と必ずしも親和的ではない「文明の作法」を、共和制に取り込むことにあった。第六章「チェスターフィールドの〈世界〉」は、一八世紀前半から中頃にかけて、政治家・著作家として活躍したチェスターフィールドが取り上げられている。著者によれば、チェ

スターフィードの作法論は、当初は名声を獲得しながらも、一八世紀後半には戯画化を経て忘却されたという点で、「文明の作法」をめぐる言説のピークとその凋落の始まりを象徴している。終章「文明」の転位」は、こうした戯画化と忘却が始まった一八世紀後半以降の時代を、「文明の作法」という統治のツールが失われるとともに、むき出しの暴力や感情、利益やイデオロギー、個人と大衆が前面に登場してくる過程として描き出している。そして著者は、「文明の作法」の思想史は、現代のデモクラシーやナショナリズムが、実は、それらを支える一つの文明の基盤が損なわれ、忘却される過程で新たに登場してきたことを、われわれに語り伝えてくれる」（二六七頁）と述べて、本書を結んでいる。

以上紹介したように、本書は、政治思想史の従来のパースペクティブに対する大胆な挑戦となっており、国内外いずれの観点から見ても、独創的な力作と評価できる。ただし、注意すべき点がある。本書は、人文主義の伝統を、宮廷政治学系列と共和主義系列に二分してとらえている。これは本書の立論自体と不可分な見方であるにせよ、他の視座設定の可能性や意義を排除するものと受けとめるべきではないであら

う。たとえば、本書ではほとんど言及されていない「キリスト教人文主義」の系譜に注目する視座からは、トマス・モアやエラスムスとヒュームを同系列に扱うことは難しいように思われる。むしろ、宗教性を帯びた自由意思論の系列として、エラスムスからトクヴィルを経て、「二〇世紀の文脈で *civility* を正面から論じたりツプマンに至るラインが浮かんできそうである。こうした見方は、宗教的超越と「文明の作法」という、もう一つの新たな（あるいはむしろ忘れられた）論題を提起するであろう。

とはいえ、政治思想史研究に対し本書が重要な貢献をなしていることは明確である。本書は、主権的国民国家の構成原理として社会契約説に注目する政治思想史や、それへの批判も含意しつつ登場してきた共和主義を主軸に据えた政治思想研究のいずれにおいても、統治の技術とそれを支えるハビトゥスへの関心が薄かったことを明らかにしている。これを深刻な盲点として自覚しない政治思想史は、狭い政治理解を前提とした政治思想史になりにかねない、という警告と受け取ってよいであろう。本書は、他に類例をほとんど見ないほど多様で膨大な文献資料を駆使しつつ、あくまでも歴史叙述

に徹した思想史の作品であるが、このように、近現代における政治理解の問題点という政治哲学的なメッセージを含んでいる点でも、重要な意義を有していると評価できる。

こうしたメッセージを発している以上（あるいは少なくとも）、今日の知的思想的コンテクストから、そう読み取られるのが避けられない以上）、最後に一言付け加えれば、著者は思想史家として現代政治への言及には禁欲的であるが、今後は政治学者の一人として、現代（そして未来）との関連性をめぐる思索に少しは踏み込んでいってもよいのではないか。貴族的な「文明の作法」が失われていったのは歴史的事実であるとしても、その失われたものだけに「文明の作法」は尽きるのだろうか。われわれは、その歴史的事実を遺憾に思い慨嘆するしかないのだろうか。ナショナル・ポリティクスの枠組に囚われない視点から見て、市民の側からの「文明の作法」への接近可能性やそれを促す歴史的資源やソシアルキャピタルはないのだろうか。地域社会ではどうか。ビジネスの世界ではどうか。日本に目を移せば、江戸百万都市や高度な文化水準を持つ地方都市の伝統の中で、何か有意義なものに残っていないのだろうか。本書を読んでいると刺激されて、こう

した問いが次々に湧き上がってくる。本書で取り上げられている思想家の多くも、それぞれの時代において、同様の性格の問いに立ち向かっていたのではないか。今日的文脈におけるそうした切実な問いについて、著者が思想家ならではの独特の視座から探究を試みることに、大いに期待したいところである。

【補足】本書については、すでに数多くの書評が行なわれている。参考までに以下に列挙しておく。

- ・辻康夫「初期近代政治思想における「作法」の再評価」『政治思想研究』（政治思想学会 第一一号（二〇一一年）、五〇四―五〇五頁）。
- ・大塚元「制度・型・作法——木村俊道『文明の作法——初期近代イングランドにおける政治と社交』（二〇一〇）を読む」（第三五回社会思想史学会（二〇一〇年）での報告<http://www.law.toho-ku.ac.jp/~imuzuka/101024shst.pdf>）。
- ・大塚元「イギリス哲学研究」（日本イギリス哲学学会 第三四号（二〇一一年）、七二―七三頁）。
- ・井柳美紀『年報政治学二〇一・一』（日本政治学会）（二〇一一年）、二九七―二九九頁）。
- ・葛谷彩『比較文明』（比較文明学会 第二十七号（二〇一一年）、一七―一七三頁）。

・白川俊介『政治研究』（九州大学政治研究会）第五八号（二〇二一年）、一八一―一八三頁（紹介）の記事。